

日本語会話における話題転換時の相づち・頷きの連鎖について  
- 初対面同士の 2 人による自由会話の分析から -

Successive use of *aizuchi* and head nod during topic change interaction in Japanese  
- Analysis of dyadic conversation between two unacquainted people -

半沢 千絵美

キーワード：話題転換、相づち、頷き、話題転換ストラテジー

外国語キーワード：Topic change, *aizuchi*, head nod, topic change strategy

要旨

本研究では日本語会話の話題転換時に相づちと頷きが連続して起こる現象に着目し、以下の仮説を立てて母語話者同士 14 組の自由会話データを検証した。(1)話題転換時には相づち・頷きが連続して起こる現象がみられ、その頻度は関連話題よりも新出話題への転換のほうが高くなる。また、新出話題への転換時のほうが長い相づち・頷きの連鎖が起こる傾向がある。(2) 話題転換時に相づち・頷きの連鎖が起こる場合は、「え」や「でも」などの話題開始部の話題転換表現の出現頻度は低くなる。データ分析の結果、(1)の仮説は支持されたが、(2)はされないことが明らかになった。また、母語話者と学習者ペアによる自由会話の分析から、学習者には話題転換時の頷きが少ないことがデータから示された。

The purpose of this research is to analyze the successive use of *aizuchi* and head nod during topic change interaction in Japanese. The data consisted of 14 free conversation segments between two native speakers of Japanese. The results supported the hypothesis that the successive use of *aizuchi* and head nod occurs during topic change interaction and the tendency was stronger when a completely new topic is introduced in the discourse. The length of the *aizuchi* and head nod sequence was also found to be related to the introduction of a new topic, implying that the successive use of *aizuchi* and head nod can function as ceasing a current topic. The use of discourse maker such as 'e' or 'demo' at the beginning of the new topic was analyzed in relation to the successive use of *aizuchi* and head nod, but there is no indication that these two elements are

quantitatively related. In addition to the native speakers' conversation data, 14 free conversation segments between a native speaker and a learner of Japanese were analyzed. They revealed the less use of head nod by learners during topic change interaction.

#### 1. はじめに

日本語会話において聞き手が打つ相づちは会話を進めるための重要な言語行動であり、これまで主に頻度、種類、機能、出現位置の分析が進められてきた（大浜 2006、陳 2000、Clancy 他 1996）。頷きは非言語の相づちとして位置付けられている場合が多いが（メイナード 1993）、実際に分析の対象となっている研究は少ない。頷きには発話行為を伴うものとそうではないものがあるが、本研究において頷きとは発話行為を伴わない、無言の頷きを指す。

相づちや頷きはメイナード（1993）によって「話し手が発話権を行使している間」、つまり話し手の発話の途中または終結部に打たれるものとして定義されているが、日本語会話では相づちまたは頷きのみが連続して産出されることも少なくない。以下の例 1 は母語話者同士の会話で相づちと頷きが続けて起こっている例である。例中の H は頷き 1 回を示し、「んーH」は「んー」という相づちが頷きと共に起していることを示す。

#### （例 1）母語話者 A と母語話者 B の会話（NS-NS 会話 14）

- A 部活やってる？  
B 部活やってないんですね  
A そうなんだ  
B HHHHH  
A そっか  
B んーH  
B 何やってるんですか？

部活をやっているかという A の質問に対してやっていないと B が答えた直後、「そうなんだ」「HHHHH（頷き連続 5 回）」「そっか」「んーH」と相づちと頷きが連続して起こっているのがわかる。そして、「んーH」という相づちを發した B が「B の部活について」から「A の部活について」と話題転換をしているが、A は既に自分が部活に入っていることを B に伝えてあったため、前出の話題が再びあらわれた形となっている。これまでの相づち研究で注目されてきたのは相手の発話を聞いていることを示したり共感を表すための相づちであり、このように相づちと頷きが続く現象については研究が少ない。

本研究の目的は、相づちと頷きが連続して起こる現象が会話中の話題転換と関連があるかを調べることである。相づちが連続して起こる現象はこれまでターン交替（郭 2003、大

浜 2006) やフロア交渉 (Iwasaki 1997、Kogure 2007) の観点から分析がなされてきたが、本研究ではターン交替やフロア交渉よりも上位の概念である話題転換という枠組みで分析する。また、非言語行動である頷きも相づちと同様の機能があると考え、分析対象に含める。相づちと頷きが連続して起こる現象にはさまざまなパターンが考えられるが、本稿では総称して「相づち・頷きの連鎖」とする。

## 2. 先行研究

### 2-1 話題転換に関する研究

これまでの話題転換に関する研究には話題転換の種類、形式、ストラテジーについて論じられているものが多い(村上・熊取谷 1995、楊 2005a、楊 2005b)。話題転換の種類というのは先行話題と新しい話題の内容の関連性を示すもので、分類方法は様々であるが、村上・熊取谷(1995)の提示した「新出型・派生型・再生型」というのがどの分類にも共通する基本的な概念として受け入れられているようである(楊 2005b)。

次に、話題転換の形式についてであるが、これは先行話題から新しい話題へ移行する際の会話参加者の相互作用に焦点をあてたもので、「断絶型・割り込み型・継続型」(村上・熊取 1995)、「協働的転換・一方的転換・無表示転換・突発的転換」(楊 2005a)といった分類方法がある。

最後に、話題転換のストラテジーというのは話題転換の際の会話参加者の言語行動や非言語行動に注目したもので、これは研究によって対象が異なっている。先行話題の終結部にみられるストラテジーと、新しい話題の開始部にみられるストラテジーに大別が可能で、相手の発話のまとめや評価など談話レベルの行動から特定の話題転換表現や助詞の出現といった語彙や文法レベルでの分析がされている(木暮 2002、村上・熊取谷 1995、楊 2005a)。相づちは話題終結部と話題開始部のどちらにもあらわれるストラテジーとして言及されているが、話題転換時の相づちの連鎖に注目した研究はない。また、笑いや頭の動きなどの非言語行動も話題転換のストラテジーとしてあげられているが、頷きに焦点を当てた研究はない。

本研究では話題転換の種類を新出話題への転換と関連話題への転換の二つに分類し、話題転換時の相づち・頷きの連鎖という一つのストラテジーに注目をしその特徴を分析する。

### 2-2 相づち・頷きの連鎖に関する研究

郭(2003)と大浜(2006)は相づちが連続して起こる現象をターン交替との関連から分析している。郭(2003)は「相づちだけでターンを成すもの」はメイナード(1993)の「話し手が発話権を行使している間」という相づちの定義とは合わないことから「相づち的表

現」と名付け、間を持たせる機能があると分析している。

大浜（2006）は「取得放棄」と「取得再放棄」というターン交替形式を提案し、相づちが続けて起こる現象を説明している。相づちを打つことによって自らがターンを取ること避け、相手にターン取得の機会を与えることができると解釈できるが、相づちが続けて起こるのはそのプロセスが会話参加者間で続いていることを意味している。大浜（2006）は日本語会話と英語会話を比較し、日本語会話ではターンの「取得放棄」や「取得再放棄」の割合が大きかったと述べている。

ターン交替よりも上位の概念で相づちの連鎖現象を分析したものには Iwasaki（1997）と Kogure（2007）の研究がある。Iwasaki（1997）は相づちが連続して起こる現象を Loop Sequence と名付け、ターンよりも大きい単位であるフロア（floor）という概念を用いて Loop Sequence を説明している。Loop sequence の機能として、フロアの移行（floor transition）、フロアの移行の前触れ（prelude to floor transition）、フロアの再構築（floor reconstruction）、開かれたフロアでの Loop sequence（the loop sequence in the open floor）の四つを提示しており、フロア保持者（floor holder）とフロア支持者（floor supporter）、つまり話し手と聞き手という役割によって構築されるフロアの開始部と終結部が相づちの連鎖によって影響を受けるとしている。Kogure（2007）は Loop sequence に非言語行動である微笑みや頷きを加えて分析をし、Loop sequence 中の非言語行動には会話参加者間の協調性を維持する働きがあると述べている。

相づちの連鎖はターン交替または役割交替といった会話が発展していく際の会話参加者間のやりとりに大きく関与すると考えられるが、本稿ではさらに大きな枠組みである話題転換との関連性を考察する。

### 3. 研究課題

話し手の発話に対して相づちを打つことで、聞き手は話し手に話を続けるよう促すことができる。しかし、聞き手の相づちに対して、話し手が話を続けずにさらに相づちを打った場合は、それは何らかの理由ですぐには話を続けられない、または話を続けるつもりはないという意思表示であると考えられる。つまり、相づちの連鎖には現行の話題についてその時点ではこれ以上話す意思がないことを相手に知らせる機能があり、それは話題転換ストラテジーの一つであると言える。非言語の相づちと言われる頷きも話題転換時に産出された場合は同様の機能があると考えられる。以下、話題転換時の相づち・頷きの連鎖に関して二つの仮説を立てる。

- (1) 話題転換時には相づち・頷きが連続して起こる現象がみられ、その頻度は関連話題よりも新出話題への転換のほうが高くなる。また、新出話題への転換時のほうが長い相づち・頷きの連鎖が起こる傾向がある。

これは、話題転換をそれまでの話題とは全く関連のない新出話題への転換と、それまでの話題と何らかの関係がある関連話題への転換に分けた場合、会話参加者がこれ以上話すことがないことをお互いに確認した上での話題転換は新出話題への転換がより多くみられるという推測が前提となっている。また、相づち・頷きの連鎖が長く続くということは現行の話題に関して話を発展させる意思がないということをより明示的に示していることとなり、この場合も新出話題への転換の割合が高くなると考えられる。

本稿ではさらに話題転換表現（木暮 2002）との関連についても分析をする。話題転換表現というのは、話題転換後に次の話題の提供者によって発せられる「え」や「でも」などの短い表現で、次の話題が始まったことを示す談話標識として機能しているものを指す。以下が談話転換表現に関する仮説である。

- (2) 話題転換時に相づち・頷きの連鎖が起こる場合は、「え」や「でも」などの話題開始部の話題転換表現の出現頻度は低くなる。

この仮説は、相づち・頷きの連鎖が話題転換を明示的に会話参加者に認識させるのであれば、次の話題を開始する際の談話標識として発せられる「え」や「でも」などの表現が用いられる必要性は少なくなるという推測から導き出された。

上記の仮説を検証するために初対面同士の女性2人による自由会話を分析する。本稿は日本語教育への貢献という観点から母語話者同士の会話だけではなく、母語話者と学習者の会話も対象とし、接触場面の話題転換時の相づち・頷きの連鎖の特徴も分析する。

## 4. データと分析方法

### 4-1 調査協力者

母語話者同士（以下 NS-NS）のペア 14 組と母語話者と学習者（以下 NS-NNS）のペア 14 組による自由会話を分析した。それぞれのペアは全員初対面同士で、全員が女性の大学生または大学院生であった。学習者はアメリカの大学に在籍しており、データ収集の時点での在籍クラスから日本語レベルは中級であると判断した。どの学習者も会話が完全に停止するようなコミュニケーションの問題なく、母語話者と 10 分の自由会話を続けることができるレベルで、SPOT (Simple Performance Oriented Test) (小林 2005) の結果からも日本語能力に大きな差はないことが示された<sup>注1</sup>。表 1 は合計 56 名の調査協力者の基本情報を

まとめたものである。

表 1 調査協力者の基本情報

	性別	母語	年齢	所属	日本語学習年数
母語話者 (n=42)	女性	日本語	18 歳~23 歳 (平均 19.7 歳)	大学生 (n=40) 大学院生 (n=2)	
学習者 (n=14)	女性	英語	19 歳~28 歳 (平均 21.4 歳)	大学生 (n=10) 大学院生 (n=4)	2 年~9 年 (平均 4.2 年)

#### 4-2 データ収集

初対面同士の調査参加者に「お互いを知るために自由に話してください」という指示のみを与え、10 分間好きな話題について話をするよう依頼した。話題としては、授業、ゼミ、クラブ活動、アルバイト、出身、海外経験、食べ物などの話題があげられた。10 分間の会話のうち開始時から 2 分間は除外し、残り 8 分間を分析対象とした。分析対象となった 224 分の会話は非言語行動である頷きも含め全てが文字化された。

#### 4-3 分析方法

##### 4-3-1 相づち・頷きの連鎖

相づちとは「はい」「ああ」「そうですか」など話し手の発話に対して何らかの反応を示すために産出される聞き手の発話で、「すごいですね」などの評価や感情を表す発話も相づちとした。頷きは Maynard (1989) の定義を参考に、「頭の縦の動きで、最低 1 回は頭を下方に動かし、すぐにそれを元の位置に戻す動き（筆者訳）」と定義した。頷きを伴った相づちは何らかの言語表現を含むため、非言語行動である頷きとは分けて分析し、頷きを伴った相づちは相づちに分類した。

これらの定義に該当する相づちまたは頷きが続けて産出されるケースを「相づち・頷きの連鎖」とし、「相づち・相づち」「相づち・頷き」「頷き・相づち」「頷き・頷き」の 4 種類などの組み合わせも可能とした。連鎖が 2 回以上続く場合は、複数の連鎖が起こっているとしたが、「相づち・頷きの連鎖」の頻度を数える際には 1 回とした。例 1 の場合は相づち・頷きの連鎖の頻度としては 1 回と数えるが、3 つの連鎖が続いていることになる。

##### 4-3-2 話題転換と話題の区分

話題転換は楊 (2007) の「先行話題の焦点とは異なる内容を会話の話題として確立させる一連の言語行動」を定義とし、話題転換の種類に関しては新出話題への転換と関連話題への転換という二つを設定した。

話題を区分する方法は筒井 (2012) を参考にした。筒井 (2012) は雑談中にあらわれる

話題を内容の変化に注目して、以下のように区分している。

- 1) それまでの話題となっていた対象や事態とは異なる、新しい対象や事態への言及
- 2) すでに言及された対象や事態の異なる側面への言及
- 3) すでに言及された対象や事態の異なる時間における様相への言及
- 4) すでに言及された対象や事態について、それと同種の対象や事態への言及
- 5) すでに言及された個別の対象や事態の一般化

本研究のNS-NS会話とNS-NNS会話で確認された話題を話題の焦点の変化に注目して上記の1)から5)に分類した。以下がNS-NS会話にみられた話題転換の例である（NS-NS会話9）。AとBはそれぞれ母語話者Aと母語話者Bという人物を指し、括弧内の数字は上記の話題区分の分類番号を指す。

Aの専攻→(2)Aが専攻を決めた動機→(4)Bが専攻を決めた動機→(1)Aの出身地→(2)Aと同郷のBの知人→(2)Aの出身地→(1)Bの一人暮らし→(2)Bの通学方法→(4)Aの通学方法→(1)Aの所属学科→(4)Bの所属学科→(4)Aの所属学科→(4)Bの所属学科→(1)副専攻→(1)大学の先生

話題転換区分のうち、本研究では1)を新出話題への転換、2)から4)を関連話題への転換として分析を行った。

## 5. 結果

### 5-1 母語話者による話題転換時の相づち・頷きの連鎖

母語話者同士の自由会話8分間の間に起こった話題転換の頻度は平均18.6回であった。全ての話題転換時の言語・非言語表現を抽出し、相づち・頷きの連鎖が起こっているかを分析した。表2はNS-NS会話の話題転換時にみられた相づち・頷きの連鎖の頻度と割合を示したものである。

表2 NS-NS自由会話(8分間)の話題転換時に起こった相づち・頷きの連鎖

	新出話題への転換時に相づち・頷きの連鎖が起こった頻度と割合	関連話題への転換時に相づち・頷きの連鎖が起こった頻度と割合	全話題転換時に相づち・頷きの連鎖が起こった頻度と割合

NS-NS (14組)	72回/117回 (61.5%)	63回/146回 (43.2%)	135回/263回 (51.3%)
-------------	------------------	------------------	-------------------

この結果から、全話題転換の5割以上で相づち・頷きの連鎖がみられることが示された。また、それは新出話題への転換と関連話題への転換では傾向に差がみられ、新出話題への転換のほうが相づち・頷きの連鎖がより多くみられることが示された。相づち・頷きの連鎖は1回の連鎖にとどまらないことも多い。例1のように、相づち・頷きが2回以上連鎖する現象もみられ、NS-NS 会話中の全相づち・頷きの連鎖の28.9%にその傾向がみられた。表4は2回以上の相づち・頷きの連鎖が新出話題への転換時と関連話題への転換時にどの程度起こっていたかを示したものである。

表3 NS-NS 自由会話 (8 分間) の話題転換時に起こった相づち・頷きの連鎖のうち連鎖が2回以上続いたものの頻度と割合

	新出話題への転換時に起こった相づち・頷きの連鎖のうち連鎖が2回以上続いたものの頻度と割合	関連話題への転換時に起こった相づち・頷きの連鎖のうち連鎖が2回以上続いたものの頻度と割合	全話題転換時に起こった相づち・頷きの連鎖のうち連鎖が2回以上続いたものの頻度と割合
NS-NS (14組)	25回/72回 (34.7%)	14回/63回 (22.2%)	39回/135回 (28.9%)

上記の結果をみると、新出話題への転換が起こった際は相づち・頷きの連鎖の3回に1回の割合で2回以上の相づち・頷きの連鎖が起こっているが、関連話題への転換ではその割合が低くなっていることがわかる。つまり、相づち・頷きの連鎖が長いことと次の話題が新出話題であるか関連話題であるかには関連性があることがデータから示唆された。

#### 5-2 母語話者による話題転換時の相づち・頷きの連鎖と話題転換表現

次に、話題転換時の相づち・頷きの連鎖と話題転換表現との関連性に着目したい。以下の例2は母語話者同士の会話の新出話題の開始部にあらわれた話題転換表現の例である。

(例2) 母語話者Aと母語話者Bの会話 (NS-NS 会話6)

A そっか、新聞部から

B H 新聞部 H 《笑う》新聞部 《ポーズ2秒》

A え、実家にはよく帰る

B え、でも月に一回は帰ってるって感じです

ここではBが高校時代新聞部に所属していたという話のあと、新出話題への転換が起こっている。Bの「新聞部」という発話のあとに約2秒間の沈黙があり、その後Aが開始する新しい話題の冒頭部に「え」という話題転換表現が用いられているのがわかる。この「え」

については木暮（2002）が「これから述べるのが会話の直線的な流れに背くものであることを示す」と分析しているように、新しい話題を提示するときに用いられる談話標識の一つである。

次の表 4 は話題転換時に相づち・頷きの連鎖が起こった場合と起こらなかった場合の話題転換表現の出現率を示したものである。

表 4 NS-NS 自由会話（8 分間）の話題転換時の相づち・頷きの連鎖と話題転換表現の有無

	相づち・頷きの連鎖のある話題転換において、次の話題の開始部に話題転換表現がみられたもの	相づち・頷きの連鎖のない話題転換において、次の話題の開始部に話題転換表現がみられたもの
NS-NS（14 組）	67 回／135 回（49.6%）	67 回／128 回（52.3%）

この分析結果から、話題転換時に相づち・頷きの連鎖がある場合でもない場合でも次の話題の開始部に話題転換表現が用いられる確率は 50%程度と変化はなく、相づち・頷きの連鎖と話題転換表現の有無には関連がみられないことが示唆された。

また、話題転換表現の有無に関して新出話題への転換か関連話題への転換かによって差があるのかを分析したところ、新出話題への転換時の 50.4%に、また関連話題への転換時の 50.0%に話題転換表現が用いられていたことがデータから示され、次の話題が新出話題か関連話題かどうかとも話題転換表現の有無とは関連がみられないことが示唆された。

### 5-3 接触場面における話題転換時の相づち・頷きの連鎖の特徴

母語話者と学習者の接触場面における話題転換時の相づち・頷きの連鎖には特徴的な傾向があるのかを調べるため、14 組の NS-NNS 会話も NS-NS 会話同様の手順で分析を行った。14 組の NS-NNS 会話の平均話題転換数は 12.4 回で、母語話者同士の会話よりも話題転換の頻度が低いことが示された。以下の表 5 は話題転換時の相づち・頷きの連鎖を NS-NS ペアと NS-NNS ペアで比較したものである。

表 5 自由会話（8 分間）の話題転換時に起こった相づち・頷きの連鎖

	新出話題への転換時に相づち・頷きの連鎖が起こった頻度と割合	関連話題への転換時に相づち・頷きの連鎖が起こった頻度と割合	全話題転換時に相づち・頷きの連鎖が起こった頻度と割合
NS-NS（14 組）	72 回／117 回（61.5%）	63 回／146 回（43.2%）	135 回／263 回（51.3%）
NS-NNS（14 組）	59 回／96 回（61.5%）	36 回／77 回（46.8%）	95 回／173 回（54.9%）

新出話題への転換時に相づち・頷きの連鎖が起こった割合は同数で、関連話題への転換時に相づち・頷きの連鎖が起こった割合もほぼ同じであることがデータから示された。

また、話題転換時に起こった相づち・頷きの連鎖のうち2回以上続いたものの割合も母語話者同士の会話と大きな差はなく、NS-NNS 会話の全話題転換時の 26.3%、新出話題への転換時の 33.9%、関連話題への転換時の 13.9%で2回以上の連鎖が起こったという結果が得られた。

これらの結果を見る限り、NS-NS 会話と NS-NNS 会話の話題転換時の相づち・頷きの連鎖には顕著な違いはみられないが、相づち・頷きの連鎖を構成している要素には異なる傾向が確認できた。以下は相づち・頷きの連鎖に1回以上の頷きが含まれているものの数と割合を示したものである。

表 6 自由会話（8分間）の話題転換時に起こった頷きを含む相づち・頷きの連鎖

	新出話題への転換時に起こった相づち・頷きの連鎖に頷きが含まれている頻度と割合	関連話題への転換時に起こった相づち・頷きの連鎖に頷きが含まれている頻度と割合	全話題転換時に起こった相づち・頷きの連鎖に頷きが含まれている頻度と割合
NS-NS (14組)	45回/72回 (62.5%)	35回/63回 (55.6%)	80回/135回 (59.3%)
NS-NNS (14組)	14回/59回 (23.7%)	12回/36回 (33.3%)	26回/95回 (27.4%)

全ての話題転換時に起こった相づち・頷きの連鎖に頷きが含まれている頻度は NS-NNS 会話では合計 26 回で、それは NS-NNS 会話中の全ての相づち・頷きの連鎖の 27.4%と、NS-NS 会話の 59.3%と比べると約半分の割合となる。また、26 回起こった相づち・頷きの連鎖で産出された頷きは合計 29 であったが、そのうち学習者によって産出されたのは 14 で、それは 7 名の学習者によるものだった。つまり、残り 7 名の学習者には話題転換時に母語話者の相づちまたは頷きの後に頷くという行為が一度もみられなかったことになる。これは母語話者 14 名全員が話題転換時に相手の相づちまたは頷きの後に頷きを産出していたのとは異なる傾向である。

#### 5-4 接触場面における話題転換時の相づち・頷きの連鎖と話題転換表現

母語話者同士の会話において、相づち・頷きの連鎖と話題転換表現の有無には関連がみられないことが示唆された。接触場面でも同様の結果が得られ、話題転換時に相づち・頷きの連鎖が起こった場合に話題転換表現が用いられている割合は 57.9%、話題転換時に相

づち・頷きの連鎖が起こらなかった場合に話題転換表現が用いられている割合は56.4%とほぼ同じであることが示された。

しかし、話題転換後の話題開始部にどの話題転換表現を用いているかには母語話者と学習者に顕著な違いが確認された。以下の表7は母語話者と学習者が話題転換後の話題開始部に用いた表現を種類別にまとめたものであるが、カイ二乗検定の結果、母語話者と学習者の話題転換表現の使用傾向には有意な差があることが確認された ( $p < .001$ )。母語話者は「え／えっ」「なんか」「でも」の使用が多かったのに対して、学習者は「あのう」「あ／あっ」「じゃ」の使用が多く、特に母語話者によって一番よく用いられていた「え／えっ」「なんか」に関しては学習者の使用が0であった。

表7 自由会話（8分間）の話題転換後の話題開始部で用いられた話題転換表現の種類

	え／え っ	なんか	でも	あ／あ っ／	えっと ／んと	じゃ	あのう	その他	合計
母語話者 (n=42)	<b>51</b> (28.3%)	<b>31</b> (17.2%)	<b>28</b> (15.6%)	16 (8.9%)	12 (67%)	6 (3.3%)	5 (2.8%)	31 (17.2%)	180 (100%)
学習者 (n=14)	0 (0%)	0 (0%)	2 (3.8%)	<b>11</b> (20.8%)	3 (5.7%)	<b>10</b> (18.9%)	<b>20</b> (37.7%)	7 (13.2%)	53 (100%)

## 6. まとめと考察

### 6-1 仮説1：まとめと考察

話題転換時の相づち・頷きの連鎖は話題転換の約半数で起こっていることがデータから示され、仮説(1)は支持された結果となる。話題転換時にあらわれる言語・非言語的特徴には様々なものがあり、それらが重複して起こることも可能なため他のストラテジーに比べてこの割合が高いかどうかの比較は難しい。しかし、楊（2005a）が話題転換時の話題終了ストラテジーとしてあげている相づち、まとめや評価、笑い、繰り返しのうち一番多く使用されていたものでも相づちの50%程度であることを考えると、相づち・頷きの連鎖現象は話題転換時にあらわれるストラテジーとしては高頻度であることがうかがえる。

また、関連話題への転換よりも新出話題への転換のほうが相づち・頷きの連鎖が起こる可能性が高いという仮説も本研究のデータによって支持された。新出話題への転換のおおよそ60%において相づち・頷きの連鎖がみられたのに対し、関連話題への転換の場合は40%代の割合となっている。

さらには、関連話題への転換よりも新出話題への転換のほうが相づち・頷きの連鎖が長

い傾向があるのではないかという仮説を立てたが、これも本研究のデータによって支持された。新出話題への転換と関連話題への転換でみられた相づち・頷きの連鎖のうち2回以上続いたものを抽出したところ、その割合は新出話題への転換時のほうが高いことがわかった。

これらの結果は、相手の相づち・頷きに対して、もう一度相づち・頷きを打つことで発話権を放棄、さらには再放棄をし、現行の話題についてさらに言及することはないという意思表示をしているという考え方と矛盾はない。お互いに現行の話題について話すことがないということが相づち・頷きの連鎖を経て確認できたため、新規の話題へスムーズに移行できるという協働的な話題転換の一つと言えるのではないだろうか。

## 6-2 仮説2：まとめと考察

次に仮説(2)で示した、話題転換表現との関連についてであるが、話題転換時の相づち・頷きの連鎖と話題転換表現の有無には関連性はみられず、相づち・頷きの連鎖の有無にかかわらず話題転換表現が用いられるは50%ぐらいの割合であることがデータから示された。また、話題転換表現の有無は話題転換が新出話題への転換か関連話題への転換かとも関連性はみられなかった。話題転換後の話題の開始部に話題転換表現があらわれるのはどのような言語環境かを特定するためには沈黙や視線などの非言語的な要素も分析する必要があるが、話題転換表現が用いられるかどうかは話者の心理的な状況によることも否定できない。

## 6-3 接触場面における話題転換時の相づち・頷きの連鎖

本研究では母語話者同士の会話だけではなく、母語話者と学習者の接触場面も分析対象とした。NS-NNS 会話の話題転換時の相づち・頷きの連鎖の最も特徴的な傾向は頷きの出現率である。母語話者同士の会話では相づち・頷きの連鎖に頷きが含まれている割合が6割程度だったのに対し、母語話者と学習者の接触場面ではその割合は3割程度であった。また、母語話者全員が相手の相づちや頷きの後に頷きを打つことが8分間の自由会話で少なくとも1回はあったのに対し、学習者は14名中7名のみが相手の相づちまたは頷きの後に頷きを産出していたことも特徴的である。

この違いの原因として、学習者は全体的に頷きを打つ頻度が低いという可能性がまずあげられると思うが、英語を母語とする中級レベルの日本語学習者が母語話者と同程度の頷きを産出していたという結果 (Hanzawa 2012) があることから、全体的に頷きが少ないことが第一の原因とは言い難い。したがって、学習者の頷きが少ないのは相づち・頷きの連鎖に限定される現象のようである。相手の相づちまたは頷きに対して頷くことで、相手に発話権を譲るという行為が日本語のコミュニケーションにおいて可能であり、それは話

話題転換ストラテジーとして有効な手段であることが学習者によって認識されていない可能性が考えられ、また、同時に相手の頷きが自分に発話権を譲るサインであることに気がついていないということも考えられる。

以下の例3は母語話者の相づちと頷きに学習者が反応を示していない様子を表している。

(例3) 母語話者Aと学習者Bの会話 (NS-NNS 会話7)

- A でもね、日本もね《笑い》  
B 《笑い》  
A どうだったか知らないけど  
A そっか  
A H  
A 19歳ですよねたしか

これは学習者Bが日本語学習の動機について「日本に興味があるから」とAに伝え、それに対して母語話者Aがコメントをしている場面である。「でもね、日本もね」とAが言ったあとは、Aの笑いに続いてBも笑い、Aの発話は続いている。しかし、「どうだったか知らないけど」というAの発話に対してBからは相づちも頷きもなく、Aは「そっか」「H(頷き)」と続けたが、それでもBから反応が得られなかった。最終的にはAが新しい話題を提供している。

このように会話参加者の一人が相づち・頷きを連鎖させる行動は必ずしも母語話者と学習者の会話だけにみられるものではないが、母語話者・学習者に関係なくこのような「無反応」が協働的ではなく一方的な話題転換へとつながることは考慮すべきである。母語話者Aの「そっか」の直後に学習者Bの頷きが1回入るだけでも、二人のコミュニケーションは双方向のものとなり、協働的に話題転換への合意がなされる可能性が高くなるのではないだろうか。

相づち・頷きの連鎖はそれのみを取り上げて日本語授業の会話練習に組み込める性質のものではない。しかし、頷きを1回打って相手に反応するだけでも会話参加者と協働的に会話を発展させていくことにつながり、会話相手に協力的な姿勢を見せられるということは学習者も認識すべきである。

一方で、話題転換表現に関しては学習者への指導項目として授業で取り上げることが可能である。学習者が「あのう」という表現を用いて、次の話題へ移ったとしてもコミュニケーションに支障はないし、間違いというわけでもない。しかし、学習者が話題転換ストラテジーだと思い使っている表現が母語話者同士の会話にあらわれないものであることは知る機会を与えられるべきであるし、学習者に自身のコミュニケーションストラテジーを

見直す機会を提供することも効果的な教授方法である。

## 7. おわりに

本研究では先行研究では注目されていなかった話題転換時の相づち・頷きの連鎖に焦点をあてて、自由会話を分析した。話題転換時に用いられる相づちに関しては話題転換時のストラテジーとして注目されていたが、本研究の結果から相づち・頷きの連鎖も重要な話題転換ストラテジーであることが示された。特に、これまで分析がなされていなかった頷きに関しては自らは発話権を取らないことを意思表示し、協働的な話題転換を進めるための手段の一つであり、今後詳細な分析が必要である。Kogure (2007) は日本語会話における「沈黙」には会話参加者の頷きや微笑みといった非言語行動が存在するため、必ずしも空白の (vacuous) 時間ではないと述べているが、相づち・頷きの連鎖も単純に「間をつなぐ」だけのものではない。話題転換を達成させるための会話参加者間のコミュニケーション方法の一つであることは確かである。

今回は初対面同士の2人のみの自由会話を分析対象としているが、今後は2人以上の会話や、親しい間柄による会話など様々な場面へと分析を広げることが必要である。また、性別や年齢が相づちと頷きの使用に与える影響を抑えるため、本研究では調査協力者の性別と年齢をある程度統制しているが、今後は性別や年齢によってどのように結果が異なるかも分析が可能である。

## 注

1. 14名の学習者のうち1名のSPOTの点数が低く、外れ値として示されたが、会話に大きなコミュニケーションの問題がなかったこと、本研究の分析において特徴的に他の学習者と異なる傾向がみられなかったことから除外していない。

## 参考文献

- 大浜るい子(2006)『日本語会話におけるターン交替と相づちに関する研究』溪水社  
郭末任(2003)「自然談話にみられる相づち的表現-機能的な観点から出現位置を再考した場合-」『日本語教育』118、47-56  
木暮律子(2002)「日本語母語話者と日本語学習者の話題転換表現の使用について」『第二言語としての日本語の習得研究』5、5-23  
小林典子(2005)「言語テスト SPOT について-用紙形式から Web 形式へ-」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』20号、67-82  
陳姿菁(2002)「日本語におけるあいづち研究の概観及びその展望」『言語文化と日本語教

育』2002年5月特集号、222-235

- 筒井佐代 (2012) 『雑談の構造分析』東京：くろしお出版
- 村上恵・熊取谷哲夫 (1995) 「談話トピックの結束生と展開構造」『表現研究』62、101-111
- メイナード、泉子・K (1993) 『会話分析』東京：くろしお出版
- 楊虹 (2005a) 「中日接触場面の話題転換」『言語文化と日本語教育』30、31-40
- 楊虹 (2005b) 「話題転換研究の概観：タイプと方略を中心に」『言語文化と日本語教育』2005年11月増刊特集号、159-185
- 楊虹 (2007) 「中日母語場面の話題転換の比較——話題終了プロセスに着目して——」『世界の日本語教育』17、37-52
- Clancy, M., Patricia, Thompson, A., Sandra, Suzuki, Ryoko, and Tao, Hongyin (1996). The conversational use of reactive tokens in English, Japanese, and Mandarin. *Journal of pragmatics*, 26, 355-387.
- Iwasaki, S. (1997). The Northridge earthquake conversations: The floor structure and the 'loop' sequence in Japanese conversation, *Journal of Pragmatics*, 28, 661-693.
- Hanzawa, C. (2012). *Listening behaviors in Japanese: Aizuchi and head nod use by native speakers and second language learners*, Ph.D dissertation, The University of Iowa.
- Kogure, M. (2007). Nodding and smiling in silence during the loop sequence of backchannels in Japanese conversation, *Journal of Pragmatics*, 39, 1275-1289.
- Maynard, S. K. (1989). *Japanese conversation: Self-contextualization through structure and interactional management*. Norwood, NJ, USA: Ablex Publishing.